

シネマテーク・フランセーズにおけるトリュフォー関連資料の調査

人間・環境学研究科 修士課程 2年

原田 麻衣

フランス

2018年9月12日～2018年10月1日

計画の概要

報告者はフランソワ・トリュフォー作品における語り手及び語りの構造に関する研究を行っている。現在執筆中の修士論文では、トリュフォー作品に通底する「運動」の主題に託されている説話的機能を明らかにし、それを語りの問題として再考することで、トリュフォー作品における語りの操作（語り方）の特異性を映画史の中に位置付けることを目的としている。そしてそのために着目している特徴の一つが、物語を支える機能を帯びているようなカメラムーヴメント（カメラの動き）である。報告者は映像分析を通してカメラムーヴメントの持つ説話的機能を具体的に考察してきたが、トリュフォーが制作段階のどの時点でカメラムーヴメントをどれくらい意識していたのかを知るために、フランス・パリにあるシネマテーク・フランセーズに保管されている脚本に関する資料を精査することの必要性を強く感じるようになった。また、トリュフォー関連資料がいつからシネマテーク・フランセーズに保管されるようになり、どれくらいの分量の資料があるのか、分類は誰によるものなのかを明らかにすることも本調査の目的の一つとした。

成果

今回の調査で得られた成果は以下の三点である。

1. 資料の流れについて

トリュフォー及びトリュフォー作品に関する一次資料の大部分（以下トリュフォー所蔵資料）はもともと、トリュフォー自身のプロダクションであるレ・フィルム・デュ・キャロッセ Les Film du Carrosse で保管されていた。それがシネマテーク・フランセーズのアーカイヴに加わったのは1999年のことである。同施設にはトリュフォー所蔵資料のうちジャン・グリュオーに関する一部の資料を除くすべての資料が移されたという。ジャン・グリュオーに関する一部の資料に関しては、ビブリオテーク・デュ・シネマ・フランソワ・トリュフォーBibliothèque du cinéma François Truffautに保管されている。現在それ

らすべての資料が各施設内において閲覧可能である。

2. 資料の種類及び資料の分類方法について

今回の主な調査対象は、「ドワネル」ものの「脚本に関する資料 scénaristique」及び「脚本 scénario」である。前者には、シノプシス synopsis、脚本に関するメモ notes de travail、脚本準備稿 traitement、カット割り台本 découpage、撮影台本 scénario de tournage、脚本決定版 scénario définitif などをはじめとするさまざまな資料が含まれており、それらの分類はシネマテーク・フランセーズによるものではなく、レ・フィルム・デュ・キャロツスによるものであることが職員の方への聞き取り調査でわかった。また、トリュフォーは『大人は判ってくれない』、『アントワーヌとコレット』、『夜霧の恋人たち』、『家庭』の4作をまとめ、*Les Aventures d'Antoine Doinel* (Mercure de France, Paris, 16-12-1970) と題した脚本集を出版しているが、その出版を機に「脚本に関する資料」に加筆・修正を施していることが『アントワーヌ・ドワネルの冒険』に関する資料群 (TRUFFAUT419-B202) から確認できた。資料への書き込みに鑑みれば、『大人は判ってくれない』、『夜霧の恋人たち』に関してはこの段階で現在「決定版」と言われている脚本が完成したと考えられる（この「決定版」はいわゆる「脚本 scénario」、つまり *L'Avant-Scène du Cinéma* に載るようなものとはまた別である）。トリュフォーは作品ごとに「脚本に関わる資料」をまとめ保管してきたが、「ドワネル」ものに関しては、そこに含まれる資料は撮影前及び撮影中に使用されたものだけでなく、*Les Aventures d'Antoine Doinel* の執筆後に追加あるいは差し替えがなされたと予想できる。この点に関しては引き続き調査を進めていく。

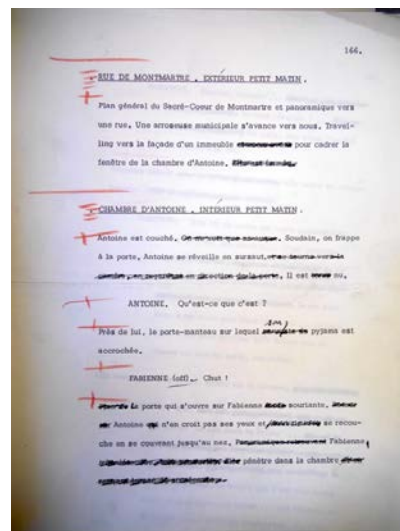
3. 脚本に関する資料及びその制作プロセスにみられる特徴について

「ドワネル」ものの「脚本に関する資料」にさまざまな種類が認められることは先述の通りだが、そこには大きく二つの特徴が認められる。一つは、ダイアログ（台詞）を書くタイミングである。一般的な脚本制作のプロセスとしてはおおよそ、シノプシスを書き、ダイアログを作り、それからカット割りを考える。しかしトリュフォーの場合はたいてい、シノプシスを書き、デクパージュを構成してからダイアログを入れていると考えられる。そのためか、印刷された状態の台本に記載されているダイアログは多くない。少なくとも明らかにダイアログよりいわゆる「ト書き」の占める分量の方が多くなっている。また、「ドワネル」ものでは『夜霧の恋人たち』と『家庭』のみダイアログリストが存在し、その後に執筆されたと思われる台本にダイアログがある程度組み込まれている。なぜこの2作はそのようなプロセスであったのか、そして完成された映像にその影響関係はみられるのか、という問いは今後の考察の課題としたい。もう一つの特徴は「ト書き」にある。トリュフォー作品の「脚本に関する資料」において「ト書き」にあたる部分はまるで小説のように書かれている。ヌーヴェル・ヴァーグの作家に関してはこれまで制作プロセ

スにおける即興性が指摘されてきた。とりわけトリュフォーは「フランス映画のある種の傾向」（1954）のなかでフランスを代表する脚本家を名指しで痛烈に批判し、当時の脚本のあり方に真っ向から対立したという印象を持たれている（正確には「脚色方法」の批判を行った）。もちろんトリュフォー作品にも多くの即興的要素が認められるが、即興を取り入れることは脚本を作りこみすぎないことと同義ではなく、それはトリュフォーの残した「脚本に関する資料」が物語っている。本調査は、トリュフォーによる脚本資料と、彼が批判した脚本家による脚本資料、ジャン＝リュック・ゴダールやジャック・リヴェット、エリック・ロメールといったヌーヴェル・ヴァーグの作家による脚本資料とを比較検討し、「脚本」という観点からフランス映画史を捉え直すことが可能なのではないかという問題意識を得た貴重な機会であった。



シネマテーク・フランセーズ図書館内にある
研究者専用ルーム



TRUFFAUT012-B012 『夜霧の恋人たち』
シナリオ決定版
映像はまさにこの文章通りである